

〔 茶 〕

1. 各茶期および一年を通しての気象概要

1月、2月の気温は寒暖の差が大きかったが比較的暖かい日が多く、一番茶期が早まると思われが、4月に入って低温が続き一番茶摘採期は遅れる傾向となった。特に4月17日には多くの地域で晩霜害が発生した。また、鹿児島県では一番茶収穫時期に強風による被害が発生した。二番茶期は、全体的に降雨が多く山間部では炭疽病が発生した。また、やや日照不足傾向であったが、夏季の天候は良好であった。秋季は降水量は極めて少なく、高温で推移したため、秋整枝後の再萌芽が目立った。

2. 摘採時期の早晚

一番茶の摘採期は4月の冷え込みにより各県とも平年よりも4日前後遅れる傾向があった。夏茶は、一番茶が遅れた影響と二番茶期も日照不足でやや低めの気温で推移したことから遅れる傾向があった。

3. 各茶期の茶価

一番茶は、前半はやや軟調気味であったが、晩霜害、強風による被害を受けた後は急激に価格を下げた産地もあった。ドリンク需要の伸びの鈍化と昨年の在庫の影響か、夏茶は全体的にかなり低調であった。

4. 各茶期の病虫害発生状況

福岡県では山間地の一部で二番茶期にもち病が発生した。また、8～9月にチャノミドリヒメヨコバイが多発した。佐賀県では7～8月にかけて果樹の害虫であるチャバネアオカメムシが一部の茶園で爆発的に発生し、浅刈り後の再生芽や三番茶芽の伸育不良がみられた。長崎県ではチャノミドリヒメヨコバイが8月中旬以降多発し、秋芽で葉縁部が褐変するなどの被害が散見された。大分県では二番茶期に炭疽病が多発した。また、クワシロカイガラムシ、ウスミドリカスミカメの発生が多かった。宮崎県では三番茶期での炭疽病の発生と秋期にクワシロカイガラムシの発生が多かった。

5. 各茶期の収量

長崎県では4月の低温の影響で一番茶が1割程度減収した。全体的に早生品種は減収、中生品種以降は増収の傾向であった。

6. 各県の平成18年現在の茶栽培面積

各県の茶栽培面積は福岡県、佐賀県、熊本県は横ばい、長崎県および大分県はやや減少、宮崎県および鹿児島県はやや増加した。以下に、九州沖縄各県の茶栽培面積を記す（表1）。

（野菜茶業研究所枕崎茶業研究拠点 根角厚司）

表1 九州沖縄地域の県別茶栽培面積

県名	栽培面積（ha）	備考
福岡	1,580	全国茶生産団体連合会調べ
佐賀	1,040	茶統計年報
長崎	764	農林水産統計
熊本	1,660	
大分	348	県園芸振興室調べ
宮崎	1,580	農林水産統計
鹿児島	8,450	
沖縄	41	